

■2026年度 中国支部 建築歴史意匠 研究交流会 研究概要

杉山琴美	岡山理科大学	勝山町並み保存地区における町家の特徴と変遷
岡山県真庭市は、現在県が指定している「勝山町並み保存地区」の国選定を目指して、岡山理科大学と連携して基礎調査を進めている。本発表では、その一環として岡山理科大学が実施した18棟の町家実測調査の結果について報告する。棟数が少ないため、全体的な特徴を分析するには至っていないものの、いずれも江戸期から明治期にかけて建てられたもので、大きな改変を經過せず、高い歴史性を有する貴重な建築物であることが確認できた。		
ダイカホン	岡山理科大学	日本の大仏様、禅宗様建築における中国の影響の研究
本研究では、日本の大仏様、禅宗様建築における中国からの影響について、日本と中国の時代背景を踏まえて軒の構造とその細部を中心に明らかにすることを目的とする。仏様、禅宗様の組物について、中国との比較研究を行い、組物の違いまたは屋根の構造の変化を明らかにする。文献調査によれば、東大寺再建の頃に使った大仏様と、鎌倉時代後期に流行した禅宗様式は、中国では同時期に使われていた様式である。この二つの様式が日本に伝わる時には十分日本の国情を考慮し、禅宗様は部分的に導入し、日本化し日本特有の建物様式が成立したものと考えられる。		
石橋陸人	岡山県立大学	野崎家追廻堂における増築過程の再検討 一実測調査及び所蔵図面の比較分析を通して一
岡山県倉敷市児島に所在する野崎家追廻堂を対象に、実測調査および所蔵図面の比較分析を通して、建築の増改築過程を検討した。分析の結果、迎賓空間である百畳敷と、主屋・台場などの裏方空間は、当初は構造的・空間的に分離されていた別棟である可能性が確認された。一方で、近代化の進展に伴う接客機能や動線計画の変化、新たな建具の導入、壁面改修などを通して、空間相互の関係性が変化していったことがうかがえた。本研究では、こうした増改築の痕跡を通して、近代化の流れと関係する建築空間の変容過程について考察を行った。		
育田夢葵	岡山大学	輪島塗工房における工程別工房空間の構成特性に関する研究
本研究は、石川県輪島市の輪島塗工房を対象に、制作工程の特性に着目しながら工房空間の構成実態を明らかにすることを目的とした。現地での実測調査およびヒアリング調査をもとに、工房を木地工程、きゅう漆工程、加飾工程に分類し、総面積、用途別面積、工房形態、内部構成要素の対応関係を分析した。その結果、工房空間の構成は工程特性と密接に関係しており、木地工程では作業・収納空間の大規模化、きゅう漆工程では安定した面積配分、加飾工程では小規模かつ個別性の高い構成が確認された。以上より、輪島塗工房の空間構成は、工程特性を基盤として形成されていることを示した。		
梶原慎之介	広島大学	島津義久の館「御内」に関する研究
本研究は、薩摩国に存した戦国期島津家の当主館を対象として、館内の殿堂構成を明らかにすることを目的とする。同時代の文献史料を検討したことによって、「御主殿」「会所」といった殿堂があったことが判明した。また、島津家で行われた儀礼を確認すると、琉球使節と島津家当主の対面儀礼などの重要儀礼は、館内の「対面所」と呼ばれる空間で行われたことが判明した。今後は、「御主殿」と「対面所」の関係性について明らかにする予定である。		
大石一平汰	島根大学	ジョセフ・リクワートの制作論における「作為」の変容過程
本研究では、建築史家ジョセフ・リクワートの言説における鍵語「作為Artifice」を中心に制作論の形成・変容を解明する。1982年出版『作為の必要性』収録エッセイの内容整理を行った結果、2点が明らかとなった。 (1)1958～71年における制作論の形成：「記憶」「形態」「人間」の関係性を基盤に「作為」を「意図的な物質への視覚的規則の付与」として理論化し、利用者の活動への作用を試みた。 (2)エッセイ集を通じた補強：「作為」に関わる「言語と建築の類推」を多様な作品事例から「分節」「比喩」という修辭的技法として具体化した。 全体を通じて記憶・言語的要素を重視する点が、リクワートの独自性と考える。		
川上皓照	岡山県立大学	アドルフ・ロースの装飾論再考
学部研究では主に日本語訳を用い、アドルフ・ロースの装飾論について考察を行った。しかし、日本語で「装飾」と一括りに訳される言葉には、原文において“Ornament”や“Schmuck”といった複数の異なる語彙が存在する。そのため、翻訳に起因する細かなニュアンスの喪失や語彙の混同により、解釈が原文の真意と乖離する懸念が残った。 そこで本年度は、ロースがこれらの語彙を明確に意識して使い分けていたのかを検証する。ドイツ語原文の精密な文献学的検討を通じて論理構造を紐解き、ロースの装飾に対する思想の深層を追求していくことを研究の目的とする。		
藤刈寿菜	岡山県立大学	グラン・グリーン大阪におけるランドスケープ・デザイン手法の分析
本研究は、現代都市公園の汎用的なデザイン傾向に対して「グラン・グリーン大阪」を事例に、「ピクチュアレスク」と「ランドスケープ・アーバニズム」の二つの枠組みから分析し、その景観的特質や都市的文脈への応答を分析した。ピクチュアレスクの観点からは空間・時間的対比があまり見られなかった一方で、夜間の光と陰影の審美的な有効性が示唆された。ランドスケープ・アーバニズムの観点からは敷地一体を関係づけるエコロジカルなプロジェクトとして評価できる一方で、イメージに形態を合わせる機能主義的なデザイン・プロセスが課題として挙げられた。今後もこの成果を踏まえ、調査を継続する。		
沖島基之	広島工業大学	磯崎新の言説における人物参照がつむぐ思考の運動
建築家・磯崎新（1931-2022）の言説は、その可変性や非一貫性についてしばしば指摘されてきた。そこで本研究は、そのような言説の「運動性」そのものに着目し、人物参照を言説の動きを観察するための視点として位置づけた。具体的には、初期の論考において対照的に参照される谷崎潤一郎とフランツ・カフカを対象とし、その後のテキストにおける位置や機能の変化を観察した。両者は一定の性質を持って繰り返し現れるものの、置かれる文脈や位置によって参照される意味は変化し続けていく。分析を通して、磯崎の言説では、人物参照が反復されながらもその都度異なる意味を帯びることで、思考が展開していく過程を確認した。		
山本彩世	広島工業大学	前川國男の建築思想における「素材」「伝統」「創造」について 打ち込みタイルの再評価を目指して
建築家・前川國男の建築思想を「素材」「伝統」「創造」の観点から、通時的に捉え直すことで、晩年の建築思想への連関を明らかにすることを目的とする。前川は晩年「打ち込みタイル」を語る際に、「素材」の「呼びかけ」といった「現象」の概念を重要視する。そこでまず、前川の「素材」に対する言説に着目し、「素材」に対する概念の変遷と連関について研究を行った。結果、「現象」への着眼は、戦前期においても確認でき、地続きの概念であることが明らかとなった。次に、前川が「伝統」をどのように捉えていたのかを明らかにするため、前川が信頼を寄せた、白井晟一との比較から、「伝統」「創造」について研究を行った。結果、前川の「伝統」「創造」なる概念は、戦前期に思想的基盤として形成され、晩年に至ることが明らかとなった。前川の戦前期は晩年の思想的基盤として、重要であることが明らかになった。今後は以上の研究をより展開させ、「打ち込みタイル」との連関に迫りたい。		